



田村 泰生氏
福島テレビ
常務取締役・放送本部長

津に来てください。それが福島にとって一番、復興につながります」
このメッセージを受ける形で、我々もさらに踏み込んだメッセージを座談会の中で発信できればと考えています。最初に自己紹介を兼ねて、それぞれの仕事と震災との関係などをお聞かせください。
田村●福島テレビで常務取締役・放送本部長をしている田村です。福島テレビでは主に報道畑を中心に歩んできました。長い記者生活を送りましたが、昨年の3・11ほどの出来事は私の過去に無かったし、3・11は日本人の生き方や価値観を変えたと感じています。
若い記者に「これは、百年後、二百年後にまで語り継がれる出来事であるという。いま福島は漢字ではなく、カタ

カナあるいはアルファベットのFUKU SHIMAとして世界に知られている。このことにしっかりと目を向け、君たちは歴史の証人になれ」といつも言っています。
露口●ありがとうございます。同じく福島からお越しいただいた吉田さん、お願いします。
吉田●福島県観光交流課に勤務しています。私は学生時代、今出川と京田辺の両校地を経験した世代です。今は福島で仕事をしておりますが、同志社大学を卒業できたことは、私の人生に非常に大きな影響を与えていると思います。震災直後の4月から同年7月頃までの私の主な仕事は、体育館などに避難されている方に少しでも良い環境で過ごしていただくこと、避難者をホテル、旅館に移動させるための制度を作ることでした。昨年5月20日頃は移動が最も多く、日に1万7000人のべ約200万人の方の移動のお手伝いをしました。
震災直後はとても観光どころではないと思っていたのですが、昨年6月頃、福島の観光を立て直す第一歩として、磐梯

吾妻スカイラインなどの観光有料道路を無料開放することが決定しました。そんな中で2013年の大河ドラマに新島八重さんの物語が決定したという報道は本当に大きなニュースで、我々も驚きました。以来、八重さんを軸にした観光復興への期待を抱きながら頑張っています。卒業してから同志社大学とこのような接点ができることは全く考えていませんでしたが、この大切な時期に八重さんを通じて、本県の観光復興に携わることができるとは、不思議な縁を感じます。
露口●お二人とも本学の卒業生で、なおかつ福島でお勤めです。今日はぜひ忌憚の無いお話をお願いします。もうお一人、同志社女子大で教鞭を執っておられる小山さん。八重さんのお話を中心に、今日は宜しくお願いします。
小山●女子大学表象文化学部英語英文学科の教員をしています。私は女子大の卒業生で、京田辺キャンパスができた時に入社しました。新島先生のことは、学生時代からいろいろ話を聞き、何冊か伝記も読んで、大変尊敬してきました。実は八重さんとも縁があって、金戒光明

「新島八重」を通して 震災復興を考える

2013年大河ドラマの主人公に「新島八重」が決まった。八重は、一般にはあまり馴染みのない人物ではあるが、幼いころから男勝りの性格であり、会津で生活していた頃は勿論、戊辰戦争に敗れ京都へ移り住んだ後も、持ち前のバイタリティを発揮し続けた。そのような「八重の強さ」と「震災復興に立ち向かう福島」を重ね合わせ、立ち上がろうとする福島・強い福島について前向きに考える企画とした。

出席者

たむら
田村
よしだ
吉田
こやま
小山

やすお
泰生氏
のりゆき
紀之氏
かおる
薫

(福島テレビ 常務取締役・放送本部長)

(福島県観光交流局観光交流課 主査)

(女子大学表象文化学部教授)

司会

つゆぐち
露口

たくや
卓也

(大学文学部教授、同志社社史資料センター所長)

語り継がれていくべき「3・11」

露口●前号の座談会では「震災復興」が基本的なテーマでした。来年1月からはNHK大河ドラマ「八重の桜」が始まりますので、今号は「震災復興」と「新島八重」のお話をさせていただく中で、希望の光が見えてくるような座談会にしたいと思っています。

前回の座談会では、福島民報社にお勤めの卒業生、馬場憲明さんに福島からお越しいただきました。馬場さんは読者に対して、最後にこのようなメッセージをくださいました。「来年の大河ドラマは会津にとっても非常に大きな出来事になるでしょうし、同志社にとっても大きなニュースでしょう。新島八重だけでなく、山本覚馬がどういう人物でどんな生き方をして、なぜ同志社を設立する新島裏に力を貸したのか。かつて戊辰戦争で会津藩は国を奪われ、斗南藩まで国替えさせられて辛い思いをしました。その中で八重と覚馬がどのように京都という新天地で生活を始めたのかを、もう一度同志社の皆さんに知っていただきたい。ぜひ会



小山 薫
女子大学表象文化学部
教授

寺（京都市左京区黒谷町）の門前で育ちました。幕末に京都守護職会津藩の本陣になったお寺です。会津墓地もあり、夏休みによくセミ捕りをして過ごした思い出があります。なにかと「会津」を身近に感じる環境ですから、近所は皆さん会津びいきです。私自身も、新島襄の奥様が会津出身で、戊辰戦争の時に籠城して活躍されたことを、いつからか思い出せないほど以前から知っており、会津にはずっと共感を持ってきました。

露口●小山さんは同志社女子大学新島八重研究会のメンバーでもいらっしゃいますね。

小山●昨年11月、研究会の立ち上げに参加しました。女子大の史料室で数年、運営委員をした関係で、お声をかけていた

だいたのだと思います。それ以来、女子大の広報課からどんな資料が届きますし、自分でもあれこれ資料を探して、少しずつ勉強しているところです。

露口●あの地震が起きた時は、どうしておられたのですか。

小山●私は女子大のジェームズ館の2階で会議中でした。その時はシャンデリアが少し揺れた程度で、「あれ、地震ですね」などとのんびり反応していたのですが、帰宅して報道を目にした時は体が震えるほどショックを受けました。阪神淡路大震災の時は教職員ボランティアが立ち上がり、私も何度か被災地訪問した経験がありますし、学生の中にも被災者が大勢いて、生々しい体験談を聞き、被害の大きさを実感しました。私が生きている限りあんな悲劇は二度とないだろうと思っていたのですが、3・11はそれを超えるような出来事でした。

露口●今回、女子大の学生で被災された方はおられたのですか。

小山●数は少ないですが、被災学生はおられます。他の学生もいろんな形でボランティアに参加しています。とにかく今

度の震災は地震によるものだけでなく、被害が複層的、多面的ですので、被災地の方々はどんなに大変な思いをされているかと思っています。

復興は「ジグソーパズル」

露口●震災からの復興には様々な側面と段階があると思います。震災から約1年4か月が経過した今、福島のお二人は、福島がどのような復興段階にあるという印象をお持ちですか。

田村●その前に、まず現状を説明させていただきます。福島は今、とにかく原発事故と向き合っています。私はあの原発を何度も取材したことがありますし、今は無残な姿を晒しているあの建物の上に立つたこともあります。私たちにとって原発とはどのような存在だったのか。なぜこのようなことになってしまったのか。そこを含めた現状をしつかり把握しなければならぬと思っています。

る、したがって原子炉は「止める、冷やす、閉じ込める」という3つの防護機能が働いているから絶対に安全であると。私たちもそれを受け入れ、最悪の事態は避けることが出来ると思い込んでいました。ところが、原子炉の暴走を止められなかった。あの原子炉建屋の壁が爆発で崩れた時、私は「今までの安全神話がある壁と共に吹き飛んでしまった」と感じました。同じような思いをした人は今、福島にたくさんおられます。

なぜそうなってしまったのか。私たちは便利な生活を追い求めているうちに、豊かさの中にどんなリスクがあるのか、見えなくなっていた。敢えて意識しないようにしてきたと言うほうが正しいかもしれません。専門家や事業者が「安全だ」と言うのだから安全なのだろうと、根拠の無い「安全」という言葉に安心し切っていた。リスクをリスクとして認識できなかったことが今、問われています。

露口●安全神話が崩れた結果、いま福島にはどのようなことが起きているのでしょうか。

田村●私は今も避難地域に行つて、いろ

んなお話を聞く機会があります。その中で一番痛切に感じるのは「分断」という言葉です。まず、放射性物質の拡散によって地域が分断されました。放射性物質を避けようとして生じる家族間の意見の違い、すなわち家庭内での分断もある。分断は徐々に孤立感を生んでいきます。先日ある地域で、今まで親しかったお母さん同士のお話を伺いました。福島に留まったお母さんが、福島県外に避難したお母さんに対して「あなたはなぜ福島を捨てたのか」と問う。すると避難したお母さんからは「あなたは子どもを愛してないのか」という言葉が返ってくる。今まで親しかったお母さん同士が、親の責任をめぐって責め合いをする会話をしなければいけない。

露口●そのような悲しい現実があるのですか。

田村●しかし復興に向かうためには、悲しい現実も直視しなければならぬ。地元に残つて一から立ち上がろうとするお母さんのような方たちにも、私たちは寄り添っていかなければなりません。

半面、怒りもあります。原発事故発生

後、報道の現場には様々な情報がどんどん入ってきました。もう冷却水が無い、炉心が露出している。そんな危機的な状況の中、にわかには信じられないようなお粗末なことがたくさん起きていたのです。冷却水を注水する装置を次の注水手段の確保を確認せずに止めてしまっていた。あるいは電源が無いという時に、新たな電源を確保するためのバッテリーを持ってきたが電圧が違っていた。あれほど安全を口にしていた人たちが、なぜこういうことになってしまふのか。なぜこんなことに私たちは今付き合っているのかと思うと、非常に悔しく腹立たしい思いがありました。

ですから私たちは「復興」という言葉を、一つの「こうだ」という形で表現することはできません。つまり今、福島にはいろんな形のジグソーパズルのピースが、たくさん転がっています。それらのピースを私たちはできるだけ多く、できるだけ克明に集めて、希望の絵が描けるような大きなジグソーパズルとして完成させなければなりません。私の思っている復興のイメージとは、そういうものな

のです。

露口●よく分かりました。吉田さんはいかがですか。

吉田●私も復興にはまだ長い時間がかかるだろうと思っています。今も約16万人の方が避難されている。県外には6万3000人が避難されているという現実があります。我々が一番考えなければいけないのは、元の土地で元通りの生活をしていただくための取り組みをすることです。ただ、放射線の問題は依然として解決せず、現実的には故郷に戻れないのが現状です。たとえ警戒区域が解除されたとしても、インフラが無ければ実際に人も戻ってきません。それではコミュニティが成り立ちません。

復興への長い道のり

露口●それでも観光は復興させなければならぬという思いで、お仕事に取り組んでいらつしやる。

吉田●おつしやる通りです。放射線などの問題もありますが、正しい情報を発信し、県外から観光に来ていただかねばな



吉田 紀之氏
福島県観光交流局観光
交流課 主査

りません。いま県外からの観光客は、正確な数字は出ていませんが震災前から3割減と我々は見えています。そこへ今度の大河ドラマを起爆剤として、ある程度、震災前の数字に戻したい。JRのデステイネーションキャンペーンの誘致活動もしていこうと話が進んでいます。私の立場から復興を語ると狭い範囲の話になってしまつて恐縮ですが、福島県が観光で元氣を取り戻す姿を早く見てみたいですね。

いま私は教育旅行の誘致を担当していますが、福島県というだけで敬遠されてしまう現実に直面しています。地元の業者さん、いくら福島県を宣伝しても保護者から反対される。でも福島県の面積は日本で3番目に広いんです。東西16

6キロ、南北130キロという広大な面積を有している。確かに放射線量の高い地域はありますが、低い所もある。ただ、それはなかなか理解していただけません。我々が新しい情報の一つひとつ積み重ねていくことが、復興につながっていくのかなと考えています。

露口●田村さんがおつしやつたように、原発問題は一朝一夕には解決しない。その上、いろんな状況が生まれてきていることもよく分かりました。我々の持っている原発認識がどれほど安直で、どれほど他人事としてしか見てこなかったかということも痛感します。現実になんかという状況になったとき、我々の生活は確実に冒されるのだということが、容赦なく分かるお話でした。ただ、我々がまったく想像していなかった状況が起きたからには、今後は新たに造る、新しいものをめざすという姿勢で向かわなければ、おそらく復興は難しいのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

田村●新たなものを構築するのは、大都市なら可能です。社会資本もそこにつぎ込まれますし、人もつぎ込まれる。しか

し今回震災に遭つたのは多くは過疎地で、しかも経済基盤が弱い所です。したがって、原発が造られた所は、原発に頼って生活をしてきました。だから、そこに新たなものを造る、あるいは地域全体を組み替えて整備するということは非常に困難です。原発災害は他の災害とはまったく異なります。最初にしないといけないのは、まず元に戻すこと。そこがスタートラインです。

小山●なるほど、よく分かります。
田村●生活環境をスタートラインまで戻せたとしても、どのくらいの人に戻るのか。避難生活が長引けば長引くほど若い人たちの、戻るといふ選択肢は少なくなります。放射線の不安がつきまとうなら、他に生活の場を求めたくなるからです。戻りたいと言ふのは、多くは長年そこで暮らしてきたお年寄りの方々です。私たちは戻りたいという人がいる限り、できるだけ環境を整備すべきだと思っています。しかも急がなければなりません。福島を再生し、蘇らせるためにも。

露口●故郷に戻りたいという人の要望を実現するために必要なものは何ですか。

田村●3つあると思います。除染、インフラ整備、長年戻れない人のための生活の保障。ただし、3つとも極めて厳しいハードルがあります。

露口●除染ひとつを取っても大変な面積が対象ですよね。

田村●いま福島市の家庭では、庭の土を表面から5センチほど削り取っています。この土は仮置き場に持っていく、そこで3年なら3年置いた後、中間貯蔵施設に持っていく。そこで30年保管し、その後、県外の最終処分地へ運び出すという計画になっています。

ところが中間貯蔵施設の受け入れ先がなかなか決まりません。自分の住む地域にそんなものは造ってほしくないと思うからです。しかし中間貯蔵施設が決まらなければ、線量の高い土砂は仮置き場で永遠に保管しなければならなくなってしまう。これでまた仮置き場も決まらない。じゃあ私たちの家庭で削り取っている土はどこへ持っていくばいいのかといひますと、やむを得ず庭の隅に置いています。負の連鎖が起きているのです。しかも除染をしたとしても、雨が降ると

山から水が移動してきます。すると、放射性物質も流れ込み、除染をしていったん下がった線量が、また上がることもあります。

露口●気の遠くなるような作業ですね。

田村●除染は家だけではありません。田んぼもそうです。道路もそうです。道路などはもうしみ込んでいますから、ショットブラスト方法と言って、小さな鉄の球をコンクリートに打ち付けて薄く削り取っています。こうして、ようやく線量が下がるのですが、幅5メートル程度の道路だと、1キロ作業するのに約2000万円もかかる。お金の問題、面積の問題、途方もない作業です。それから、仮に中間貯蔵施設を造っても、膨大な面積に膨大な量を貯蔵しなければなりません。試算しただけでも1500万立米から2800万立米、東京ドームの約25杯分が必要だと言われています。それだけの面積の土を最終的には福島県外に移すといひますが、今度はどこへ持っていくといふのでしうか、課題山積です。ここを乗り越えないと先へ進めないというのが現状です。

大河ドラマ

「八重の桜」への期待

露口●復興を多面的に考えていく必要も僕はあるのだらうと思うのですが、根底にそういう事実があるという認識を持つことは基本ですね。今のお話を踏まえながら、復興に向けて地元で新たに始まった動きがあればお聞かせください。

田村●日本銀行福島支店が、大河ドラマ「八重の桜」が福島県にもたらす経済効果を試算しました。約113億円になるそうです。観光客が入ってくれば、それだけで70億円。さらに消費が増えるので、生産の上がる分が約30億円。福島県民1人あたり約5600円の効果になります。観光面が震災前のレベルに戻ったならば、観光客の落とすお金や生産増加を含めると約650億円、先ほどの数字の5倍になるのではないとも言われています。ここはぜひ吉田さんに大いに活躍していただき、少なくとも福島県への観光が活性化するようにしていただきたい。これは吉田さんの手腕にかかっています。

露口●「八重の桜」の制作が決定した時、

県ではどういう反応でしたか。

吉田●昨年5月末でしょうか、新聞に記事が出て、その1週間後くらいに正式発表があったと記憶していますが、やはり「新島八重って誰だ」という話は県内でもありました。もちろん私は知っていましたが、県庁、観光課の職員も八重さんをあまり知らない。ただ大河ドラマの効果が絶大であることは誰もが知っていましたし、福島県がメインの舞台になるのは初めてだということで、一同喜びに沸きました。大河ドラマの誘致は福島県でも悲願でしたから。

今回は震災からの復興という趣旨ではありますが、福島県にとっては念願のことですので、何とかこれを活用して観光誘致につなげていかないとけません。観光客は7割は戻りましたが、残りの3割は戻ってきません。「八重の桜」によって、平成25年度には震災前までにレベルを戻そうという観光目標ができました。露口●県民の方々の反応はどうでしたか。吉田●実は、福島県で大河ドラマの夢という、まずは会津若松だったんですね。会津若松市はずっと、初代藩主の保科正

之を主人公にした大河ドラマの誘致活動をしていた、新島八重はまったくノーマークでした。でも今回のドラマ化決定を受けて、既に若松では商店街に小旗やのぼりがずらつと並んでいます。だんだん八重さんの認知度は上がっているのではないのでしょうか。まずは若松に盛り上がっていただき、もともと会津藩だった地に盛り上がりを広げていき、県内全域に波及効果を広げていきたいと考えています。

露口●復興、復旧をベースに「八重の桜」を考える時、このドラマのエグゼクティブ・プロデューサーをしてもらえる内藤慎介さんが、こんなことをおっしゃっているって聞きました。「八重の桜」にはいつもの大河とは違う、特別な意味合いがあります。福島はもとより東北を元気にするための祭りを起こすこと。実際に東北を訪れること、あるいは思うことだけでもいい、このドラマを見ている方にとって何かのきっかけになればという願いが込められているのです」と。

お祭りという言葉には語弊があるかもしれませんが、先ほど田村さんが言った

ような、原発問題が厳然としてあるということは根底に据えながらも、一方ではこのドラマをお祭りにするという方向で復興を取り上げていくのは良いことではないでしょうか。それに対して我々はどういうようなお手伝い、参加ができるのでしょうか。

小山●社史資料センターでは、既に2009年に「新島八重の生涯」という企画展をなさいましたね。

露口●NHKの番組「歴史秘話ヒストリア」で八重が取り上げられたのを契機に、この展示を行いました。この時ちょうど僕は会津へ資料を調べにいきましたが、会津の方は八重さんをあまりご存じなかった筈。研究者でも、詳しい方はそれほど多くなかったと思います。



露口 卓也

大学文学部教授、
同志社社史資料センター所長

1983年3月には八重の没後50年を記念して、「同志社時報」で「新島八重をめぐる」という鼎談を行っています。出席者に同志社の井上勝也先生がいらつ

しゃったのですが、「同志社では新島先生については、この百年間、直接教えを受けた人はもとより、極めて多くの人があらゆる角度から語ってまいりましたが、八重夫人については残念ながら、あまり語る人がありませんでした」とおっしゃっている。八重さんはその後、随分たくさん研究がなされて本も出されるようになりましたが、大ざっぱな八重像が大半です。会津でも新しい資料が出てきて、随分認知が進んだと思いますが、改めて今日ご出席の方々に八重さんの印象をお聞きたいものです。特に小山さんは女性として、八重の生き方についてどうお感じですか。

新島八重を育てた会津の教育

「ならぬものはならぬ」

小山●私はとにかく、カッコいい人だなと思います。八重の生きた時代の会津が

どんなに大変だったかは、想像を絶するものがあります。先ほど福島での「分断」についてお話がありましたが、八重自身も家族が分断されていますね。その試練を乗り越えて、新時代を切り開いたわけ

です。

露口●まさに波乱に富んだ生涯ですね。小山●八重は1845年に生まれて、20歳の頃に、兄の覚馬が見込んだ川崎尚之助（洋学者）と結婚しています。2人は

会津城の籠城時にも一緒に戦ったけれど、結局、混乱の中で離別しました。籠城前には弟の三郎が、鳥羽伏見の戦いの傷が元で亡くなり、籠城後には父の権八も城外戦で亡くなり、京都で活躍していた覚馬も、鳥羽伏見の戦いで処刑されたという噂を家族は信じていました。八重と、母の佐久、覚馬の妻うら、姪のみねは米沢に行き、農作業をしながら、わびしく辛い生活を余儀なくされたようです。

露口●そこで覚馬の存在がきっかけで、八重たちが京都に出てくる。

小山●覚馬は本当に凄い人だなと改めて思います。京都で薩摩藩によって幽閉されていた時に、将来の日本像を論じる

「管見」を書き、それが認められて京都府の顧問（副知事職）になりました。兄が思いがけなく生きていたどころか活躍していたことで、八重たちは覺馬を頼り、佐久、みねとの3人で京都に来ます。それが1871年。大きな転機でした。

以降はそれまでの生活とまったく異なり、八重は覚馬の勧めで英語と聖書を勉強して教職にも就きます。つまり1872年、公立女学校の先駆けである「新英学校及女紅場」（通称「女紅場」にようば）で教鞭をとりました。手工芸の他、英語をどんなに勉強していこうという学校です。そこで八重は、養蚕、機織りを担当し、寄宿舎の舎監も兼任しました。女紅場の英語の教員だったエヴァンズ夫妻から英語を習い、覚馬の勧めで宣教師ゴードンのところへ出入りして、聖書を学ぶようになります。その中で新島先生と知り合っ
て意気投合したのでしょうか、結婚後は八重自身が積極的に同志社女子部の教育に関わっていきます。

当時の武家の女性としては非常に個性的なキャラクターだったと思います。お兄さんの影響が強かったでしょうね。本当に新しい人だった。こだわりなく、いろんなことにチャレンジしました。

露口● 武家社会を考えると、当時の会津では男女の差が激しかったのではと思いますが、会津の女性である八重が京都に出てきて、英語の勉強を始めたリクリスチャンになったりした。そのようなバイタリティーを生み出す土壌が会津にあったということなのでしょう。田村さんいかがですか。

田村● 今回、大河ドラマに新島八重を選んでいただいたことは、私は本当に嬉しく思っています。ただ私は民間テレビ局の人間ですので、NHKの番組を大々的にビジュアルする立場にはございませんが(笑)。

露口● あっ、そうですね(笑)。

田村● このドラマが会津に光を当ててくれたことには、重い意味があると思います。

八重は子ども時代のエピソードからして、力持ちであるとか、自分でも、男の真似が好きだったという発言もあるので、

す。大河ドラマも含め、この時代のドラマは薩摩、長州藩から見た、勝者側の目線で描かれているのが多かったと思います。

ましたね。藩士の子弟は10歳になると、全員入学が義務づけられていた。

田村●その入学前に教え込まれるのが、会津の精神とも言うべき「仕の掟」(※1)です。これは会津の武士はこうあるべき

という話を分かりやすく説くもので、必ず最後に「ならぬものはならぬです」という言葉がある。会津藩の教育はこれに象徴されると思います。八重さんは女性だから日新館には入れませんし、什の掟の第7条には「戸外で婦人と言葉を交へてはなりません」という、女性蔑視と見られるものも入っている。しかし兄の覚馬は日新館の講師をしていましたから

八重も仕の掟はよく理解していたと思います。そういう会津藩の教育を受けた者が京都へ来て、しかもキリスト教の洗礼を受けるのは、大変な勇気が必要だったはずです。しかし誰もが尻込みするような道へ、彼女は決然と進んでいった。それは彼女が仕の掟のような極めて儒教色の強い精神構造を持っていたからこそ踏み切れたことなのではないでしょうか。「ならぬものはならぬ」の裏返しだったという見方を、私はしています。

露口●誰もが尻込みするような道へ決然と進んでいく。今の時代でも、きつと輝いたであろう生き方ですね。吉田さんは八重のダイナミズムについて、どうお考えですか。

吉田●当然「ならぬことはならぬ」の精神があつたからこそ、会津の籠城戦があり、京都でクリスチャンになり、新島襄の奥さんになり、洗礼を受けた後にいろいろ批判を受けても高いプライドを持ちつつ生きた、と言えるのではないでしょう。会津藩の精神がしっかりと根付いていた。だからこそ、こういう魅力的な女性になった。

私は会津出身ではありませんが、会津人の氣質を考えると、人見知りでなかなかよそ者を受け入れないが、情が深く、懷に入ってきた人間は本当に温かく受け入れる。かつ忍耐強さも兼ね備えている八重さんもそういう女性だったのではと思います。大河ドラマでは、ぜひそういう八重さんの生き方を描いてもらい、それが福島県民の復興を勇気づけることになればと願っています。

りますね。

田村● 私も会津若松支社を経験しましたので、会津の三泣きはよく分かります。まず会津に赴任してみると、会津人のとつつきにくさに泣く。そのうち、なかなか打ち解けられなかつた相手が非常に優しく、人情に厚いことを知って泣く。そして任期が終わって会津を去ることになると、今度は別れ難くて泣く。この言葉は今でも残っています。

す。しかし今回は新島八重を主人公にして、敗者側、特に会津から見た時代が描かれる。少し余談になりますが、東北地方に同志社大学の出身者は東京の大学出身者と比べると極めて少ないんです。ですから私は、とにかく「山椒は小粒でもピリリと辛い」と同志社をアピールしています。そういうった意味で、会津の八重さんに光が当たり、同志社が注目されることにわくわくしています。しかも戊辰戦争で逆賊の烙印を押されながら、そこから這い上がっていく、その生き方が私たちにどんなメッセージを伝えてくれるか、非常に興味深いものがあります。

新島八重の知名度は低いです。ただ、女性でありながら女性という枠組みを越えていろんな所で活躍しました。しかもスベンサー銃を持って籠城し、夜襲にも出かける。男のすることを私もできるのだと立証した。京都に来てからは、自分の新しい生活を「正しいことだ」との信念で、それを実践していく。その強さはどこで育まれたのか、私は会津藩の教育に目を向ける必要があると思います。

露口●会津には日新館という藩校があり

どこで育まれたのか、私は会津藩の教育に目を向ける必要があると思います。

藩のため国のため
男も女も懸命に生きた時代

露口●「会津の三泣き」という言葉もありますね。

田村 ●私も会津若松支社を経験しましたので、会津の三泣きはよく分かります。

まず会津に赴任してみると、会津人のところづくりに泣く。そのうち、なかなか打ち解けられなかつた相手が非常に優しく、人情に厚いことを知つて泣く。そして任期が終わつて会津を去ることになると、今度は別れ難くて泣く。この言葉は今でも残っています。

私が会津若松を去る時、当時はなぜか

私が会津若松を去る時、当時はなぜか

特集 「新島八重」を通して震災復興を考える ■

皆が会津若松駅に集まって万歳三唱をして送り出すという慣習がありました。私は車を使っていたのですが、どうしても皆が会津若松駅で見送るというので、隣の駅に車を置いて会津若松駅で万歳三唱の見送りを受け、また1駅戻って車を取り次の地へ赴任した経験があります（笑）。会津若松には、人に対するそういう熱い思いが連綿と生きているんです。

小山●八重さんも、きっとそんな風土の影響を受けて育ったのでしょうか。ところで先ほど、仕の掟の中に、いわゆる女性蔑視とも言えるような教えがあったということですが、私は、一概に「女性蔑視」とは言えないのではないかと思います。

いろんな記録を読んできましたら、八重さんがスペンサー銃を持って籠城して戦おうとした時、弟の形見を着て城に駆け込んでいきます。籠城した女性の中で最初に髪を切ったのは自分だとも書いていますね。最終的にはほとんどの女性が髪を切ったようです。あの当時女性が断髪するには、余程の覚悟が必要だったはずですから、緊急時の行動ですね。八重さんの場合は、お殿様（松平容保）の前で

不発弾を解体して説明したという逸話もあり、スケールが違います。他の女性も大勢籠城し、城外の雄刀隊も含めて、それぞれ戦ったわけですから、気骨のある強い女性が多いと思うのです。仕の掟のもとで、女性が抑圧され、ひたすら耐えていたわけではなく、むしろ、男性も女性も毅然と生きていた一面があるのではないでしょうか。

田村●男尊女卑という表現が適当かどうかは別として、藩祖の保科正之が作った「会津家訓十五箇条」は、基本的に朱子学に基づいていますね。

小山●そうですね。

田村●朱子学は儒教ですから、儒教の精神では、すべて君主に尽くすことが唯一無二のものとされています。個人よりも家、家よりも藩、藩よりも国、つまり徳川宗家。そういうヒエラルキーがある。

男女の間でも、常に女性は男性を立てましょうというヒエラルキーはきちんと分けられていて、家訓十五箇条から日新館の仕の掟に至るまで、連綿と受け継がれてきた。そういった中で会津藩があれだけの苦境に陥った時、藩の人々はどう考

えたか。男にはもちろん頑張ってもらう。しかし女性も与えられた役割を果たさなければ、この城は滅びてしまう。会津城を守るのは、つまりは国のためだ。そういう枠組みの中で動いたのだと私は理解しています。

小山●私もそう思います。その枠組みの中で女性として何が出来たかを考え、毅然として働いた。根性が入っている、凄い人たちです。戊辰戦争の敗戦後、八重や覚馬もそうですが、会津は新時代を担う逸材を多数輩出していますね。家老職だった山川家の兄妹（※2）もそうです。誰もが会津精神や武家のプライドを持ち、未来志向で頑張ったのでしょうか。

日新館で教授をしていた覚馬は、22項目に及ぶ「管見」の中で「女学」についても書いていますね。新島先生以上ではないかと思えるくらい、覚馬は女子教育について進んだ考えを持っていました。覚馬と八重のお母さん（佐久）も、非常に合理的な人だったと聞きます。そういう意味で、本来的な資質もあるでしょうが、現代の私たちから見ても、八重はかなり恵まれた環境にあったのではないか

と思います。武家社会という制約のある生活の中でも、比較的自由でのびのびと育てられた。だからあの時代の京都にあっても、信念を持ち、次々と新しいことができたのではないのでしょうか。会津での生活環境や教育があったからこそ、京都で彼女のキャラクターが花開いたのだと思います。

※2 山川兄妹

会津藩国家老・山川重固の子。主に明治の教育界で重要な役割を果たした。浩（初名・大蔵）は東京高等師範学校（現・筑波大学）初代校長、健次郎は現在の東京大学・京都大学・九州大学の総長を務めた。二葉は女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）に勤務。津田梅子らと共に11歳でアメリカに官費留学した捨松（初名・さき）は、のちに梅子が設立した女子英学塾（現・津田塾大学）を支援。日本初の看護婦養成学校設立にも尽力するなど、教育・慈善活動に力を注いだ。

八重さんの認知度を高めるために

露口●確かに、明治に入ってから八重さんのジャンプの仕方には、なかなか凄いのがありますね。当時は「耶穌教」と呼ばれたキリスト教に入っていた、

あのエネルギーはどこから来たのかと、八重さんを考える度に思います。非常に強い意志をどこかで持たない限り、あんなことはできない。八重さんがあのような人生を送れたのは、やはり腹の中に取まっているものがあつたのではないか。そこへ籠城経験もあつて、八重さんという希有な人をつくっていったのではないかと想像します。

さて、現在福島では八重さんに関して、どういう企画、取り組みをしておられますか。

吉田●八重さんの認知度は徐々に上がってきているとはいえ、まだまだです。県の施策としては、会津、福島、東北、そして全国へと、八重さんを知っていたくための取り組みを計画、実施しています。「八重ちゃんしょ」というちらしもそうです。八重さんの生涯から、ゆかりの名所、人物などを分かりやすくまとめたものです。それから、新島八重の生涯を描く「ふくしま八重隊」というキャラクターを総勢11名で結成しました。会津時代に始まり、新島襄も登場する京都時代までを描くということで、9月から

全国キャラバンをスタートさせ、いろんなイベントに登場する予定です。京田辺校地のクロバー祭にも出演予定です。「八重たん」というマスコットキャラクターも、全国から300件の応募をいただいて県でつくりました。こういう、子どもたちにも親しみを持ってもらえるような取り組みもしています。

会津若松に加えて県内全域に盛り上がり育てていこうということで、秋には「新島八重」企画展も行います。9月14日から11月4日まで白河、二本松、会津の3会場での同時開催。白河と二本松会場での展示テーマは「新島八重の生涯と戊辰戦争」です。「八重の核」を通して、戊辰戦争ゆかりの地も知っていただきたい。二本松には二本松少年隊という、白虎隊に似た悲劇がありました。12歳から17歳の少年たちが悲劇に遭った。白河では戊辰戦争で最も長い期間、約百日の戦闘があった。一番の激戦地だったと言われています。

この企画展については、同志社大学社史資料センターにも大変お世話になりました。本当に貴重な資料、百点をお借り

しました。山本覚馬の「管見」のレプリカですとか、京都案内絵図、八重さんの刺繍作品。女子大には八重さんの衣装の再現をお願いしていて、県へ寄贈いただけるということで、二本松会場で展示させていただきます。

露口●女子大では、八重さんを広く知っていただくための取り組みとして、具体的にどんなことをしておられますか。

小山●広報課にもいろいろとサポートしていただき、ホームページに特設サイトが立ち上がっています。研究会のメンバーが手分けしてコラムを書いたり、「八重クイズ！」も始めました。私はまだこれからですが、他のメンバーは各種イベントで八重さんをテーマに講演しています。学生課では9月16日から18日にかけて、バスで巡る「会津若松・安中弾丸ツアー」を企画しており、これを機会に八重さんを知ろうという様々な動きがあります。私も折に触れて、特にゼミではそういう機会も多々ありますので、私が知ったことを学生に伝えようと思いますし、私自身に出来ることは小さなことでもしていくつもりです。

苦難と激動の時代にこそ 八重の生き方が輝く

露口●さて、八重さんという人を育てた会津の風土や教育のお話が出ましたが、八重さんを今この時代にドラマの主人公として取り上げることの意味を、一緒に考えてまいりたいと思います。田村さんもおっしゃったように、東日本大震災が起き、今の福島県には到底我々が考えられなかったことが起こっている。八重さんの場合も同じで、時代の中に人を置いてみるのが非常に大事な気がするんですね。八重さんの個性ばかりに目をやると、逆に八重さんが見えなくなってくるのではないかと。時代の中で八重さんを語ることこそが、たぶん復興と八重さんをつなぐ大きな鍵になる気がします。

いつの時代も、そこにある状況はある程度受け入れざるを得ないと思います。福島の方々が置かれている状況も、受け入れざるを得ない。受け入れながら、己の人生をどう生きるかというところにたどり着かざるを得ない。八重さんについても、そういう語り方をすることによつ

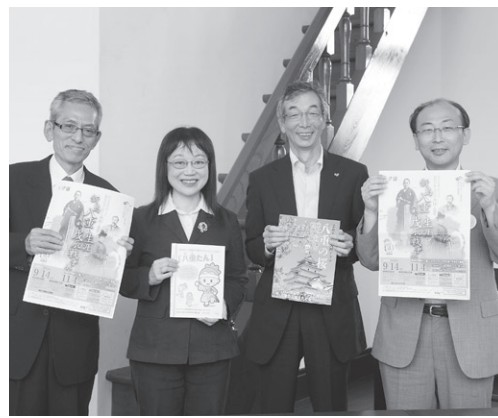
て、東北復興につないでいければと思います。最後に、福島からお越しいただいたお二人に、ぜひメッセージをいただければと思います。

田村●いま「時代の中に人を置く」というお話が出ました。八重を支えた精神は何だったかと考えると、こじつけかもしれませんが、「ならぬものはならぬ」で終わる仕の掟に、私はどうしても行かざるを得ません。会津若松市では平成15年今の時代に合わせた仕の掟「あいづつこ宣言」を策定しました。6条から成っています。第1条は「人をいたわります」。続いて「ありがとう ごめんなさいを言います」「がまんをします」「卑怯なふるまいをしません」「会津を誇り 年上を敬います」「夢に向かってがんばります」と続き、「やつてはならぬ やらねばならぬ ならぬことはならぬものです」と結ばれています。

なぜ今、このようなものが必要なのでしょうか。現代は情報量がもの凄く多く、いろいろなものの見方を提供してくれま

ている。根本的な部分、普遍的なものが揺らいでいるように思えてなりません。現代社会で最も重要なのは、この「根っこ」のところを見つめ直すことではないでしょうか。だからこそ八重さんの生き方が、現代にも大きな意味を持つのではないかと私は思います。

最後に、読者の皆様に申し上げたいことがあります。野田総理は「福島の復興なくして日本の復興なし」とおっしゃいました。ただ私は、時間の経過とともに、



この言葉が風化しつづけると感じています。この風化を恐れています。先ほどもお話が出ましたが、今なお16万人の方が避難生活を送っておられ、福島県からは6万3000人が県外に出ています。故郷に帰れない人もいます。まだ見通しを立てられない人もいます。一方で、福島から遠く離れた所で、感情的に放射線問題をいろいろと論評する話が聞こえてきます。問題ないレベルとされる放射線に過剰に反応するヒステリックな声も聞こえてきます。被災地において、そういう話や言葉を聞くと、非常に複雑な思いがいたします。被ばくはもはや覚悟の上で、それでも守らなければならない人生にこだわっている人々がいます。そういった人がいることに思いを寄せていただきたいと思っています。

吉田●私も田村さんと同じような話になります。大河ドラマを機に、今の時代にとって八重さんの生き方が重要になってくると思いますし、私自身も福島原発の事故が次第に風化していくことを非常に懸念しています。時間の流れとともに風化していくのは仕方ないとは思いますが、

私たちが言いたいのは、今も避難されている方々がいらつしやるということなのです。できるだけ何かの機会に、それは思い出していただきたい。

福島県としても、関西とは距離はありますが、「八重の桜」を契機に関西との交流を強化していきたいという思いもあります。同志社との交流のきっかけができましたので、震災を通じてのつながりではありますが、引き続き同志社の皆さん、卒業生の皆さんには、ぜひ福島県を忘れないで応援していただければと思います。

今回の震災を通して改めて感じたのは、

県民の皆さんは皆、福島が好きなんだなあということですね。人と人との絆の大切さも感じています。復興には相当時間がかかると思いますが、私もあと20年くらいでしょうか、今の職にある限り、福島県の復興に全力を尽くしていきたいという思いでいます。

露口●本日は長時間にわたり、誠にありがとうございました。2012年7月26日今出川キャンパスクラーク記念館